様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４５５４

研究課題名（和文）近世・近代移行期における教育と宗教の関係―仏教者による教育活動の実態の検証から

研究課題名（英文）A Historical Study on Relationships between Education and Religion: with a Reference to Meanings of the Modernization of Japan for Buddhism Priests

研究代表者
梶井　一暁（Kajii, Kazuaki）

岡山大学・教育学域・教授

研究者番号：６０３４２０９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　日本の近世・近代移行期社会における教育の状況と特質に迫るため、教育史に宗教史の観点を重ねる研究を進めた。歴史のなかの教育の発達をみると、制度的には教育は宗教と切り分ける状況の進展がある。しかし、実態的には両者が切り結ぶ関係は単純でない。教育は宗教と明確に区画して論じうる単一領域でない。
　この問題関心から、とくに仏教者の活動に着目し、仏教者が信仰や教化に当たると同時に、教育や学問を担う存在であった性格と意義を探求した。研究の実証性と独自性のため、一次史料の調査にもとづく考察に努めた。地方や中央の寺院や機関に伝存する手書き文書などの調査を進め、教育史と宗教史を接続する歴史の過程の提示をめざした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　教育が政治、経済、文化、科学などの要素と関連して成立する領域であり、宗教も教育と切り離し得ない要素であることを、歴史研究を通じて論及した。前近代社会における教育と宗教の混交状況はもちろんであるが、近代移行期においても宗教が人間形成に果たす意義は分厚い。社会教育における宗教性は無論、学校教育においてもそれは認めうる。
　江戸時代の寺子屋から明治時代の学校への移行は、教育を制度化するものであり、ほぼ世俗化を意味した。しかし、教育や学問という「知」の担い手としての仏教者（僧侶）は、近代学校の教師の一角を占めた。特定教義を教える宗教教育ではなく、精神の「潤」の加味として宗教教育を捉える視点も指摘した。

研究成果の概要（英文）：　This research is to explore the situation and characteristics of education development from the 18th century to the 19th century, staying educational folkways and patterns of early-modern in the tide of the modern times in Japan. I discussed education from a viewpoint of a relationship with religion particularly and pointed out that, first, the condition of being closely connected to each other was one of the essence of a certain matter on education as human development through modernization of Japanese society, second, religious people, especially Buddhism priests each fulfilled often not only a doctrinal and courtesy role but also an educational and academic one.
　Primary historical documents included handwritten manuscripts at local temples were gathered and analyzed diligently.

研究分野：教育史

キーワード：寺院　僧侶　近代化　人間形成　寺子屋　私塾　手書き文書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

教育と宗教は、一定の距離をもって整理される営みとして把握されるのが、日本近代以降の基本的な態度である。しかし、長期的な視野のなかに両者の関係を収めてみると、気づくのは教育と宗教は互いに関連しあう領域として歴史を刻んできたことである。それはとりわけ近代学校教育制度現出以前の近世までの社会に顕著であった。

僧侶は神職らとともに日本近世まで、世俗教育を担う重要な存在であったとすれば、新しく国民国家が成立し、学校教育制度が確立する近代、どうなるのか。明治維新は政治体制の改革であるだけでなく、教育構造と宗教秩序の改変も促した。政教分離が進み、廃仏毀釈と神仏分離の影響を受けるなか、寺院の維持自体が危うくなる。僧侶は歴史のなかで長く果たしてきた教育担当者の役割を途端に降りてしまうのか。それとも新しい形で教育に対する役割を果たしていくのか。

近世・近代移行期における教育と宗教（仏教）の関係について、歴史研究・宗教史研究は、宗教にかわって「非宗教」たる教育こそが国民統合の核として国家の中枢に据えられていくのが近代であり、その新しい教育の定着は「非教育」と自己規定していく宗教をいわば踏み台にしていく過程であった、という説明を試みている（谷川穣『明治前期の教育・教化・仏教』2008）。刺激的な議論である。教育史研究はどう応答するか。まだ明確な説明を与えることができていない。筆者はこれに応答したい。

時代の変動期に教育と宗教はどのような混交を経て、互いを峻別していくのか。おそらくその棲み分けの関係は、単純な分離だけでなく、依存の側面も含むはずである。本研究で筆者は、近世と近代に目線を配しつつ、とくに仏教（者）による教育への関与のあり方の変化を捉え、その実態と特質を実証的に究明し、教育史的意義を問うことを目的に設定するものである。

２．研究の目的

教育に関する営みは、単一の領域として成立するのではない。政治、経済、文化、科学、宗教などの諸要素が関連しあって成立している。本研究は教育と宗教の関係について、歴史の観点から実証的に考察するものである。とくに仏教（者）の役割に着目して研究を行う。従来の教育史では、教育の世俗化に対する関心による記述が中心であり、「非教育」たる僧侶や寺院に関する考察は進捗をみない分野であった。しかし、本研究では宗教史の成果も摂取しつつ、教育史の一主題としてこれを積極的に位置づけたい。そして、①近代学校教育制度現出以前の近世において僧侶が庶民の世俗教育に果たす役割の検討、②近世の手習師匠が近代の学校教師を勤めていく場合の僧侶の存在の提示、③近代の学校教育に継承・温存される近世の宗教的要素の分析を通じ、近世・近代の移行期、換言すれば変動期に教育と宗教が結ぶ峻別と依存の関係を考察する。

３．研究の方法

本研究の基本として、一次史料の調査にもとづき、実証的な究明作業を進めた。地方や中央（京都）の寺院や機関に伝存する史料を調査し、先行研究などで発表されてきていない一次史料の収集に取り組んだ。手書き文書を含め、これらの分析により、研究の実証性を高めることに努めた。ただし、コロナ禍のため、当初の計画どおり、県外での調査を幅広く行うことが難しく、史料の発掘は限られた。

そのため、二次史料の活用も工夫した。教育史資料を宗教的観点から読み直したり、宗教史資料を教育的観点から読み直したり、読み取りの観点を変えて二次史料を利用した。一次史料で事例や状況を具体的に提示できるのがやはりよいし、二次史料では総説的な記述にとどまりやすい限界はある。しかし、史料を読む視点や組み合わせの留意により、教育史と宗教史を接続する歴史の過程の検討に努めた。

４．研究成果

（1）近世・近代移行期の人間形成史的位置づけ

近世・近代移行期は政治・法制的転換期であるだけでなく、社会・経済的また価値・文化的変動期である。この変動期にあって、人びとの生活や日常のなかにある教育と宗教は、未分化であったところに特色がある。庶民層において、僧侶が町や村の学校の教師であったり、エリート層において、高等学校生が信仰を求めて学校外にアイデンティティのありかを探ったり、教育と宗教は人間形成作用全体のうちに、ともにあった。人間形成は学校の内外でなされるものであった。その人間形成に対する教育と宗教の関係は、混交的また相互的といえるものであるはずである。

19 世紀日本の教育状況について、宗教を正面から問う教育史論文ではないが、本研究が課題とする近世・近代移行期の教師と教育論に着目した論文を作成した。

（2）信仰の場であり、学習の場でもある近世寺院

宗教施設である寺院は基本的に信仰の場であるが、とりわけ近世社会において寺院が有する特色は、文字学習の場としての性格を増すところに捉えうる。この近世寺院の性格を検討するた

め、埼玉県、岐阜県、広島県、徳島県などの寺院所蔵史料を調査し、寺院で開設される寺子屋（手習塾）と手習教材などの分析を行った。史料は文字史料とともに、絵画史料も積極利用し、分析の多角化を図った。研究の成果は論文として発表し、当該自治体の文化財関係部署にも伝え、成果の地域への還元に努めた。

（3）僧侶教育を通じた身分移動が可能な近世社会：近代の能力主義社会との接続

愛知県の寺院での史料調査にもとづき、近世濃尾平野の農家に生まれた子弟が都市に出て、専門的な僧侶教育を受けることにより、学僧としての将来を形成していった実例を考察した。近世は身分制社会であり、職業は世襲されるイメージがある。しかし、僧侶は必ずしも世襲を原理としなかった。したがって、庶民が所与の身分と異なる身分を獲得する回路として、僧侶となる道が存在した。個人が所与の身分や土地を離れ、自身の能力や努力により、僧侶としての将来を切り拓いていけることは、近代以前、この近世に、限定的ながら、能力主義の萌芽的な位相を認めうることとなる。

この問題関心から、尾張国の僧侶を事例に、地方農民が中央の京都本山学校（東本願寺学寮）で教育を受けることを通じ、僧侶となり、親や周囲の者たちとは異なる新たな社会的地位を獲得していく過程を、実例にそくして分析した。農民から僧侶への身分移動は、所与の社会的条件や地理的条件を離れるものであり、教育の結果であった。近世社会において、庶民が教育によって所与身分を抜け出ていく、あるいは変換していく回路があったことを、僧侶となる進路に着目して検討することは、教育史だけでなく、近世史にも資する研究視角を提出するものであると考える。歴史学の機関誌に論文が掲載された。

教育によって僧侶となる進路にみられる能力主義的業績主義的なありかたは、たしかに、身分主義的属性主義的原理が一般の近世社会全体にあっては、部分的なものであったかもしれない。しかし、それは近代の学歴主義や立身出世の教育観の形成に有利な条件であったといえるはずである。近世寺院が内包する近代的要素を探求した。

（4）近世私塾の一形態としての寺院の把握：仏教学の私塾

日本の近世社会に発達した教育機関の一形態としての着目から、仏教諸教団が設置した僧侶教育・仏教研究機関をとりあげ、その学習者たる修学僧に関する基礎的考察を行った。具体的には西本願寺が 17 世紀に設置した学林（京都）を扱い、修学僧の地方事例として阿波国の寺院から学林に学んだ僧侶について、学林の学籍簿にあたる史料『大衆階次』（龍谷大学図書館所蔵）にもとづいて把握した。『大衆階次』に記載される約 16500 人の修学僧（所化と呼ばれる）のうちから、阿波国寺院出身 85 人をリスト化した。

中央の機構たる学林の安居制を検討するとともに、上京する地方の学習者側の状況として、阿波国の学林修学僧の出身寺院、修学期間、身分などを考察した。そして、学林修学僧を近世私塾の学習者との関係において位置づける視点を提示した。すなわち、近世最大の漢学塾として知られる咸宜園の学習者とその遊学動向を参照しつつ、学林を仏教学を専門とする私塾として捉える見方を提案した。

近世社会における僧侶の性格を把握すると、宗教者であると同時に、漢文を解する知識人であり、地元にあっては自坊で寺子屋（手習塾）や漢学塾を開く教師でもあった。そして、京都などの都市とつながって仏教学の修学を行う学習者であった。阿波国寺院が学林に送り出した修学僧は、他の私塾の学習者とどう交流し、何を地元に何を持ち帰り、それは士庶の学習者と何が違ったのか。論文を作成したが、これらの実態はまだ捉え切れておらず、史料の調査と分析の継続の必要があると思っている。地方寺院の協力を得て、所蔵史料の調査を進め、続稿を期したい。

（5）近世学習者としての僧侶

学習者や知識人としての僧侶が切り結ぶネットワークや文化的環境の位相という関心から、歴史的考察を進めた。瀬戸内地域を事例に、史料は文書が中心であるが、石碑や墓碑などの史蹟も一部調査した。

予備的な調査段階にあるが、近世末から近代初に開かれた岡山県北地域の漢学・医学塾について、入門帳や学習課程に関する史料を閲覧・撮影した。それらの史料から、この私塾には庶民を中心とする入門者があり、そして入門者のなかに宗教者（僧侶）が含まれていることを確認した。私塾学習者としての僧侶の背景である所属寺院・出自・経済状況などは、まだ調査できておらず、今回の成果をふまえて追加調査を急ぎたい。とくに漢学・医学修業と仏教学修業の接点について、地域の知識人としての僧侶の学習活動を、庶民の学習活動との関係や影響を捉える考察から、その具体例を提示できるようにしたい。この私塾から、医師だけでなく、教師、あるいは政治家も出ていることを考えると、地域の学習グループとしての結社における僧侶の位置も検討する必要がある。他には安芸国の野坂完山の漢学・医学塾における僧侶の入門の例もある。成果をまだ論文として公表できていないので、継続して研究を進めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 梶井 一暁	４．巻 179
２．論文標題 近世阿波国の修学僧に関する基礎的考察：西本願寺学林の事例から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	６．最初と最後の頁 15～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/bgeou/63235	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 梶井一暁、他4人	４．巻 176
２．論文標題 教員養成に関する比較発達史研究の試み（3）：ドイツ教育書を読む明治期日本の小学校教師	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	６．最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/bgeou/61464	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 梶井一暁	４．巻 301
２．論文標題 近世浄土真宗修学僧に関する一考察 ： 農民子弟の学寮修学と寺院住持	５．発行年 2018年
３．雑誌名 史学研究	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梶井一暁	４．巻 166
２．論文標題 文字学習の場としての近世寺院に関する一考察	５．発行年 2017年
３．雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/bgeou/55473	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 田中卓也編	４．発行年 2019年
２．出版社 東信堂	５．総ページ数 272
３．書名 日本の教育史を学ぶ	

１．著者名 尾上雅信・三時眞貴子編	４．発行年 2022年
２．出版社 協同出版	５．総ページ数 229
３．書名 教育史（新・教職課程演習第２巻）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関